とりとめのない思い出

本田明二

今年は協会も緊縮財政だから，簡単な目録しか出来ないと思っていたが，委員の活躍で，何んとかまとまったものが出来るようだ。

私は毎年出るこの目録を見るのが楽しい。なかでも「全道美術協会小史」というページは，注意深く読むと，なかなか面白い。あの人は，あの頃賞をもらったのか。この人はあの時会員になったのか，などといろいろの思い出を綴ってくれる。

終戦の年，22人の会員で創立された全道展も，今や100人をこえる会員を数える。そのこと自体，会の生長や発展といえるかどうかは別として，大変大きな世帯になったものである。

その間，会を去った人々や，物故された人々もいる。第10回展のあと，居串佳一氏がなくなられ次の年岡部文之助氏，翌年伊藤信夫氏，1年おいて上野山清貢氏と，4人もひき続き長逝されたのは，少なからずショックであった。イロハ順などという妙なジンクスめいたこともささやかれたが，幸いその後は比較的無事に過ぎているのはめでたい。

生きている人々の思い出は，それが過去のものでありながら，生々しく現在につながるが，死んだ人の思いでは，あくまでも私の過去に，印画のように定着する。それはその作品が過去から現在に続いているか，過去にプッツリと切れているかということにつながることかも知れない。

物故された人々は，それぞれ色々の思い出を残してくれた，心にのこる人々である。

伊藤信夫氏は札幌に住んでいたし，私が事務局をやっていた時の会計をうけもっていたので特に親しくしていた。陸運局でも会計をやっていたかたい人であった。いわゆる絵かきらしい風ぼうではなく，やはりお役人らしい人であったが，役所をやめたら色のついたシャツにベレーをかぶって，ゆっくりアトリエで絵を描きたい，というのが念願であった。せめて年に一度行動展の審査にゆくときはそんな服装をたのしんでいた。

胃癌で死んだのだが，本人は死ぬまでそれを知らなかった。奥さんは医者から知らされていたが，とうとうそれを本人には言わなかった。本人は腹膜に水がたまって胃を圧迫していると信じて疑わなかったのである。もしそれを知っていたらそのショックは死期をもっともっと早めたにちがいない。

地方展で一緒にでかけた時など，宿屋の食事もほんのちよっと箸をつけるだけで，私の健康をうらやましがった。こぶし大に生長してゆく癌を知らなかったのは無知というより無条件で奥さんの言葉を信じていたからだろう。夫の死を宣言された悲しみをおしかくし，いつもにこにこしていた奥さんが，伊藤さんに最後の何点かを描かせたのではないかと今でも私は信じている。だから伊藤さんの作品を見ると，奥さんの顔も思い出される。

私は物故された人々を中心に，いろいろの思い出を書くつもりであったが，どうも筆が進まない。物故された人々の思いではまた別の機会に書くとしよう。

ついこの間20周年記念展をやったと思っていたが，早や来年は25周年。何周年記念ということは，はなやかなお祭りに見えるが，考えて見ると，やはり過去を振りかえることが主なよう

である。日本人の習慣で5年とか10年とか区切りをつけて，苦しかったことや，楽しかったこと，それぞれの思い出にふける。そしてその区切りを足場に，飛躍的発展を，などと考える。しかし一美術団体が飛躍的発展などありえないことで，人間1人の肉体の精神の生長や，企業の目ざましい発展とは比ぶべくもない。もしそのように見えるものがあるとすれば，それはそこに含まるれ個々の人々の生長の集積が，そう見せるのだと私は思っている。

だから何周年記念などのお祭りは無用というのではない。なにもむずかしく考えなくともお祭りさわぎは楽しいではないか。

私もお祭りさわぎは好きな方だが，どうも失敗ばかり多かったように思う。

10周年の時であったか，絵画講習会をやったことがある。夏休み中の小学校を会場に，華々しくひらいたまではよかったが，受講者がさっぱりなく，途中でやめてしまった。

全道展は年1回の公募展だけでなく，いろいろのこともやりたい，というのが発端だが，もうひとつ「美術映画と講演」の会もその年にはじまった。映画会社を廻って安く借りられる美術映画を集めて来て，㊐のニュース劇場で無料で公開した。第1回は多分岩船さんなどが出て，ピカソに意見をした話などして盛会であったと記憶している。

若いころ（勿論戦前のことだが）岩船さんが渡仏留学したとき，ピカソのアトリエを訪門する機会にめぐまれた。いろいろの作品を見せてもらい，感激した彼が，あまりうまくないフランス語で「私はもっと勉強しなければならない」と言ったつもりが「私」と「あなた」を間違えて，「あなたはもっと勉強しなければならない」と計らずもピカソに意見をしたという話である。日本の一画学生に意見されて，ピカソは「そうだそうだ」と言ったという。岩船さん自慢の話である。

この映画と講演はだいぶ続いたが，映画をさがすのが大変なのと，財政的にも苦しくなって止めてしまった。その上無料だというのに人が集まらないのが痛手であった。どうも全道展は人集めが下手なのかもしれない。

だが私は映画館でも上映されない美術の短編映画の上映には，まだ未練をもっている。

10周年の時には創立会員に記念品を贈った。戦時中疎開していた人々も10年たつと，大部分の人が東京に帰った。会の創立に努力した人々に対する感謝の意味もあったし，ひとつには，北海道に残っている人たちが中心になって会をもりたててゆく，というひとつのけじめでもあった。

今でも，全道展は創立会員の意見でも左右されるとか，創立会員がいなければ何もできないとか，思っている人がいる。部外の人がどう思おうと勝手だが，すべての会員の自由な発言で，民主的に運営されている，と私は思っている。10周年はそんな意味でも，ひとつのけじめであった，と考えるのは手前味噌か。

ともあれ，過去の思い出に浸っているのはいい気持だが，現実の問題になると，そうはいかない。

毎年の会場を㊐に依存していたのが，今年は改修工事で会場がない。いろいろ検討した末，道新ホールということになった。壁面を造らねばならない。号数も制限しなければならない。いろいろの問題がでてくる。今さらデパートの有難たさがしみじみと感じられるが，どんな条件でもやらねばならないし，その条件のなかで最大の成果をあげねばならない。

こんな時には，ことさら我々の美術館があればとつくづく思う。早く造ってもらいたいものだ。